

竜騎士団長は、

「スペースプレイヤーに



間違われたたよりの

—目 次—

- 1 竜騎士団長、レイヤーに間違われる 002
- 2 竜騎士団長、ご奉仕する 030
- 3 竜騎士団長、本番プレイを開始する 047
- 4 エピローグ 062

「ほ、本当にお前たちの言う通りにすれば元の世界に戻れるんだらうな？」

ジークムントはジト目で狭い密室で自分を取り囲む青年たちを見上げた。

ドラゴン討伐をようやくと終えて王都への帰路につくはずだった。

だがそこで、まさかの召喚事故。

時折、王国内で異界からの召喚陣が出現して人をさらう事件が多発していたが、よもや竜騎士団長である自分が遭遇することになるとは思いもしなかった。

ただでさえドラゴン討伐の際に竜の血を浴びて、ドラゴン化が進行しているのだ。はやく帰国して、神官から清めの儀式を受けなければならぬというのに、よりにもよって辿り着いた異界は、ジークムントの知る世界とはケタ外れの文化を持つ場所だった。

呪文を詠唱しなくても遠方の人間と話せる通信機器『スマホ』に、魔力を消費せず灯りをともせる『デンキ』、さらに人を襲う魔物は出ない治安の高さ。

そして機能性の一切ない鎧をまとった人々が集まる『コスプレ会場』——とやらにジークムントは召喚された。

困惑しているところに手を差し伸べてくれたのが、今いる若者たちだった。

三人とも若い。

二十代くらいだ。騎士団の新人りと変わりない。

薄いシャツに防御力皆無のズボンをはいている。

彼らはしきりにジークムントのことを『コスプレイヤー』と見知らぬ単語で賞賛した。彼らに導かれるままにこの狭い密室——『カラオケボックス』へ連れてこられた。

「つまり、ジークムントさんが俺たちにご奉仕してくれたら、あんたは元の世界に戻れる。俺たちも楽しめる。お互いに良いことづくめのプレイって事でしょ？」

プレイの意味がよく分からなかったが、ここで深く追及して彼らのやる気をそいで元も子もない。

「確かにそうだが……こういう事はその……一対一が良いと思うのだが」  
強引に肩を掴まれソファに座らされたまま、彼らを見上げる。

今まで部下に命じることが多かったせい、誰かに頼みごとをするのは稀だ。  
そのせいか妙に気が引けて、弱腰になってしまう。

召喚事故に遭った者のうち、無事帰還した者の話では皆、異界で会った人々に『奉仕』をして戻ってきたと古い文献に書かれていた。

となれば彼らの要望をできるかぎり叶えてやらねばならない。

——それがどんな内容であったとしても。

「え〜いいじゃん。乱交プレイ。今日のコス会場、俺好みの奴いなくてさ。そこへジークムントさん登場じゃん？　こういう日に焼けた肌にさ。白いものぶっかけ

たくなるよね」

「ッ！」

腰を抱き寄せられて、鎧のすき間から太ももを何度もなでられる。ごつごつとした青年の指は股間にふれそうでふれてこない。

「おっ。敏感ですね。これは剥きがいありそう」

「ふ、服なら自分で脱ぐ……と言って——ッ」

そこへ複数の手が体に絡みついてきた。

長剣ごと帯を外され、鎧を脱がされ、中に着込んでいた黒い騎士服もあつという間に着崩される。

「すっげ。コスプレイヤーの衣装って本当作り込み度すごいな。この鎧、戦った跡まであるじゃん。リアル」

「頭の角もすっごいよな。ねえ、これ外せんのか？」

ドラゴンの血を浴びてもう半日以上は経っている。

両耳の上から、よきりと生えた角はもう立派な硬さになっていた。

「やめ——ッ！　そこは感覚がつかなくて、こら、勝手にさわるんじゃない……ッ」

やわらかい指先がぐるりと半円を描く角のさきつぽをなでまわす。太い根元を手のひらで包み込まれると、妙な気分になる。

(……討伐後の昂たかぶりが……まだ、残って………ッ)

「うわ。全然外れねえ。おつ。ひっぱられて痛み感じると気持ち良くなっちゃうタイプ？　ジークムントさん」

「そんな……ことは……ないっ」

「またまた。嘘ついちゃダメでしょ。ジークムントさんの股間、盛り上がってんじゃない」

腰まわりをなでていた手がズボンにゆっくりと近づいてくる。

青年の言うとおりに、黒いズボンが股間がテントを張ったように浮き上がっていた。

「違う……これは戦ったあとの昂ぶり……ッ」

「うーわ。イベントで撮影されるのを戦うとか言っちゃうんだ。かなり設定入れ込むタイプ？」

「設定などでは……ないっ！」

竜騎士団長であることも事実だし、ドラゴン討伐という激戦の後であるのも本当だ。ただドラゴンの血や体液は、滋養強壯の秘薬にも使われるほどで、その血を浴びればただでは済まない。

（早く戻って……身を清めねばならないのにつ）

だがジークムントが今いる場所は異界だ。竜の血を清めてくれる神官も、魔術もここには存在しない。

部屋にいるのは性欲のたかぶった男たちだけだ。

「このカラオケボックス、友達が店番やってるから今日はオフパコオッケーなんだ



よね」

「マジで？ ヤリ放題じゃん」

「ヤリ部屋だけに」

くすくすと笑う声は、騎士団の詰め所で部下たちがシモの話をするときの雰囲気  
に似ていた。

どの娼婦がいいだの、下品な順位付けをしていた。

あの時とそっくりだ。

憤懣ふんまんやるかたない顔で彼らを眺めていると、背後から銀髪を一房持ち上げられた。  
くんくん、と鼻を鳴らしてうなじを舐められる。

「ッ……よさないか！」

肘打ちひじうで応戦しようとしたが、股間をなでられて勢いを殺そがれる。

「ジークムントさん、うなじちょっと蒸れてるじゃん。汗かいてんの？ すげーい

「いいい」

他人に匂いがかがれるなど、初めての経験で虫酸むしずが走った。

「髪、女の子みたいに背中まで伸ばしててさあ。これ、バックからなら絶対、勃つわ。俺」

「出たよ。カズくんの無茶ぶり」

「どうせ誰でもイケるクチだろ」

仲間が茶化すが、腰を抱いてくるカズは意にも介さなかった。

「いいだろ。こんな上玉じょうだまめったに出会わないし」

そう言つて、唇をむさぼられた。

「うん……んッ……っ」

キスした経験など一度もない。生まれてこの方ずっと剣を磨くことに力を注いできた。娼婦を抱く時間さえ惜しいと思ひ、童貞のままだ。

それをこんな場所で、自分の初めてのキスが奪われるとは思わなかった。  
しかも年下の男に。

(こいつ……うまいっ……！)

逃げようとすれば舌で絡め取られて、キツく搾り取られる。唾液<sup>だえき</sup>まで吸い取られて、息苦しい。

犬歯をしゃぶられ、頬の裏側を何度もしつこくなめまわされ、最後には上唇を引っばるほどきつく吸われた。その間もずっとゆるく勃起上がった股間を手のひらでなでまわされていた。

「っ。ゝゝッ！ ……ッ……」

「お〜お〜。泣きだしちゃって、可愛い〜。ファーストキスだったんでちゅか？」

「この年でそりゃ無いっしょ。ねえ、ジークムントさん」

「!」

年下の青年たちのからかいを無視し、勝手に唇を奪ったカズを睨みつけた。  
人なつこい顔に特徴的なたれ目は部下の　　にそっくりだ。

(名前が思い出せない……ッ。異界にいるせいなのか……?)

苦しげに目を伏せると、カズに両肩をつかまれた。

「あれ？ マジで初めて？ うっそ。もっと堪能しとけば良かった。うわゝ、ジークムントさんの初めて奪っちゃったよ俺」

「とかいって、めちゃうくちゃやる気満々じゃん。カズくん」

「え、年上の処女もらえるとか最高のご褒美だろゝ」

唇の端から垂れる唾液を手でぬぐうと、カズに黒いシャツを思いつきり胸元からひんむかれた。ボタンがちぎれて吹き飛ぶ。

「おい！ 何して——」

今度は他の青年に唇を奪われる。カズとは違うひらべったく、長い舌。蛇にしゃぶられているような感覚にゾクゾクする。

「おほ♡ ジークムントさん、陥没乳首なんだ。かわいい」  
今まで部下に悟られぬよう隠していた恥部をカズに見られた。とっさに手で胸を隠そうとしたが、残りの青年たちに両手を捕まえられる。

ふう、ふう。

こそばゆい風を陥没乳首に吹きかけられる。

(こいつツ……！ 体が敏感になると、分かっていて……ツ)

あらぬ悲鳴が漏れたが、幸いにもキスされていて響くことはなかった。

くにゅ♡ くにゅくにゅ♡♡

指先で両方の乳首をほじられる。

乳輪をなでたかと思えばつままれ、さらに指の腹を突っ込んでくる。

(やあッ！ 指、いれて、くるな……ア！)

「うーん、これは結構な恥ずかしがり屋さんだな。俺、頑張っちゃお」

へちよ♡♡

肉厚な舌先が陥没した乳頭をなめて、ほじる。乳輪が唾液にまみれ、何度も舌先でつつかれた。

次第に動きが大胆になっていき、最後にはおっぱいをねだる赤ちゃんのように乳首を吸われた。

(——だめ、だ。また、変な声が出ちゃ……、……ひんッ♡)

涙がこぼれたが、すぐに腕を掴んでいる青年になめとられる。

「あとちよつとなんだよな」。ほら頑張れ。ジークムント」

(あッ♡ 勝手に呼び捨てに、する、なッ……このッ、クソガキッ！)

「うゝん。今、俺のこと罵った気がするから、お仕置き」

ずぢゆるゝ♡ ずぢゆるゝッ♡ ちゅぽん♡

右の乳首がカズの舌に吸い出され、ピンク色のぷつくりと勃起した乳頭が姿を現す。唾液まみれの淫靡な光景に、ずっと我慢していた体が限界を訴えてくる。

(だめっ……ダメっ……今、イクのは……絶対だめッ)

こんな年下のクソガキ風情にイカされるなど、あつてはならない。けれど、そう思えば思うほど体はイキたいと訴えてくる。

肉厚な赤い舌がチロチロと勃起乳首を持ち上げて、舌の上で転がす。

カズがちらりとこちらを見た。その目は愉快そうに笑っていた。

ジークムントの事など全てお見通しだと言わんばかりの目だった。

「おら、イケ」

ぐにに、にちゅ♡

舌先で勃起した乳首を押しつぶされる。と同時に盛り上がった股間も、カズの手  
のひらでぐりぐりと包み込まれる。

(や——だめ……それ、本当にイク——うううッ♡♡)

ぴゅくくく♡

自分の性器から先走りが漏れる感触がした。下着がじんわりと濡れる。

熱い吐息に混じった気持ちいいため息をカズは聞き逃さなかった。

「ジークムントさん、今、軽イキしたでしょ？」

「して、ない……いッ♡」

「もう声が甘ったるくなってるんだよな。お前ら下も脱がして、どうなってるか見てやれよ」

「マジすか。カズさん、鬼畜♪」

残りの手が伸びてきて、無慈悲にも下着ごとズボンを脱がされる。

「やめなさい！ 手を、離せっ！ 貴様ら——うん？！」

に、ヂュウ♡♡

口のなかにさつきまで乳首をしゃぶり尽くしていたカズの舌が割り込んでくる。

逃げる舌はあつという間に捕まえられて、カズの、男の唾液を口内に流し込まれる。

歯のかたち、柔らかい粘膜を舐められたあと、上唇もたっぷり吸われた。



(ツ！ こいつ、やっぱり、うまい……、……ツ♡♡)

思わず彼の肩に手をまわしそうになる。

「おお！ やっぱ軽イキしてんじゃん！ 下着、濡れちゃってるよ。ジークムント  
団長」

「……ツ！！」

あまりの恥ずかしさに耳まで熱くなる。もう彼らの顔を見ることはできなかった。必死に顔をそむけて目をつむるが、両腕をつかまれた状態では耳をふさぐことはできなかった。

「しかも可愛いサイズしてんなく。俺のと比べたら、お子さまサイズじゃん。ジークムントさんのおちんちん」

「ツ」

「お澄まし顔してても、おちんちんから軽イキした証拠出てまちゅよ。ほらほら」  
つんつんと指でつつかれたが、無視した。

確かに彼らに奉仕するとはいえ、心まで全て明け渡すつもりはない。

「お。気の強い顔いいね。そそられるわ。そんじゃ、初体験の団長さんに筆下ろしのプレゼントしてあげる」

「一体なにをする……つもりだ」

息もたえだえに質問するとカズはソファに置かれたカバンから、妙な形のモノを取り出した。

柔らかく透明な筒<sup>つつ</sup>。

透明だが薄いピンク色がかっていて、筒の内側が外からでも見える。

内部はゆっくりと螺旋<sup>らせん</sup>を描いていた。

「うわ。筆下ろしってカズくん、そういう……」

「ほんと、鬼畜<sup>おにちく</sup>だなあ」

残り四人が呆れた声を上げる。

「なんだよ。お前らだって見たいだろう？ ジークムントさんの童貞が食べられちゃうところ♡」

透明な筒を手で折り曲げながら、今度は透明な液体を筒の内部に流し込んでいく。一体なにが始まるのか。

彼らの意図が分からず、腰が引ける。

こんなこと、手強い魔物を前にしてもなかったというのに……。

ゆっくりとカズが透明な筒を持ったまま近寄ってくる。

「はい。じゃあ、いただきます」

ぶぢゅ——ちゅううううう♡♡♡

ジークムントの細い性器が透明な筒のなかに押し込まれていく。内部はあの透明な液体でぐっしりと濡れている。しかも外から見えた螺旋は小さなひだがいくつも寄り集まったモノだった。

（——まさか、これは……ッ）

カズがにんまりと笑う。

そして透明な筒を――。

ジークムントの性器が包まれた筒を――。

思いつきり両手で握り込んだ。

「ッ、……くっ！　ッ、ッ、ッ♡　いやアああああ！」

自分でも想像しがたいほど甲高かんだかい悲鳴を上げていた。恐ろしいほどに筒の中が気持ちいい。小さなつぶつぶが細い肉茎に絡まり、締め上げて、しゃぶりついてくる。

「やあ！！　抜けっ！　今すぐ、抜けえええ！」

気持ち良すぎて、今にも意識が飛びそうになる。

こんなのは初めてだ。

挿入した時、冷たかった液体はあつという間に人肌の温度にぬくまり、余計に肉茎に絡みつく。カズは透明な筒を握り込んだまま、今度は上下に動かし始めた。

「だめっ。動かすの、だめ……ッ」

「えー。なんで？ ジークムントさん、女の子とセックスした経験ないんでしょ？  
なら、オナホールで経験積んどかないと、さ♡ ほくら、ごしごし♡ ごしごし♡  
っ♡」

ぷちゅ♡ ぱちゅ♡ ぱちゅ、ぢゅゅううう♡♡

同じ男だからかカズの動くスピードは的確だった。ジークムントがイキそうになれば止まり、ようやく快樂が収まったかと思えばまた再開する。

「まあ、これからジークムントさんが俺らのメスになるから、あんまり経験させなくともいっかな〜」

スツ、とオナホールの動きが止まる。

もうジークムントの肉茎は出したくてたまらなかつた。

寸止めなんて冗談じゃない。

（いや、だめだっ……。こんなもの、私は……欲しがったりしない！）

けれど敏感になった体はより強い快楽を求めていた。もっと気持ち良くなって、心も体も溶けてしまいたい。

「あ……アあ……、……」

「ん〜？ どしたの？ ジークムントさん」

こちらの状況を分かっていて、カズは手を止めている。

あと少し。

ほんの数センチ、腰を揺らすだけでイける。

(だめ……駄目なのに……イ♡)

ぬ、ちちっ♡

ジークムントの腰が浮いた。

ほんの数センチ上空で止まったままのオナホールめがけて自ら腰を打ち付けてし

まう。

(ツ!! こんな……恥ずかしい真似……ツ)

けれど、もう止まれなかった。

欲望のままに透明な筒めがけて、細い肉茎を自分から出し入れしてしまう。やわらかいつぶつぶにカリ首を挟んでもらえるように。

細い肉ひだに龟头をぶつけて、包み込んでもらえるように。

（私は……最低だ……最低なのに……！　　ヒン……ッ）

「ジークムントさんってば、そんなに気に入ったんだ。このオナホ。かわいく。でもこれ終わったら、俺ら専用のメスにすっからな」

耳元に吹き込まれた言葉にぞわりとした。その悪寒おかんがなぜだか快楽に結びついてしまう。

（こんな……クソガキどものメスになんか……ならな……い……イイ！　　ア♡

ア♡　　あ♡　　イク！　　イツちゃ——うううう♡♡）

びゅるるるる♡♡